

## 「ホコリタケの教材性(1)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

秋はキノコの季節だ。キノコ(肉眼で見えるレベルの菌類の子実体)は、菌類にとっては、胞子を拡散させる為の器官である。顕花植物でいえば、果実に相当する部分である。顕花植物の場合、秋に果実やその中の種子を落とし、翌年に発芽するものが多い。菌類の胞子は、秋に拡散して冬期は休眠、翌春に菌糸を伸ばす。その年のうちに菌糸を発芽させる種類もある。

胞子を作って拡散させるための「子実体」は、普通、柄(茎)と傘を持った「きのこ型」である。その傘の裏のヒダで胞子をつくり、拡散させるのに都合がいい形態だ。しかし、中には、キノコの内部に胞子をつくる種類もある。その代表格が「ホコリタケ」だ。



「ホコリタケ」 *Lycoperdon perlatum* (ハラタケ科)

10月上旬 北軽井沢 C. Tanaka

ホコリタケは、珍しいキノコではなく、ごく普通の菌である。北欧の森でも、見たことがある。一緒に森を歩いていたスウェーデン人の友人が、**Värtig röksvamp!**と叫び、その場で皮をむき、生のままムシャムシャ食べたのには驚いた。ホコリタケは「埃茸」である。その名の通り、ホコリだらけのキノコなのだが、若い子実体は、内部がハンペンのような質感で、食用になるのだ。私も味噌汁の具にして食べる。まさ

にハンペンのような食感だ。しかし、生はちょっと・・・その友人に「食べてみな」と言われたが、“Nej Tack...”(いいえ結構です)であった。



ホコリタケは、このように地面に大量に群生する。基本的には1個ずつ発生しているが、中には根元がくっついて「束生」の形態をとる個体もある。



この写真では、2つの子実体が根元で束生している。その下には、密な菌糸体が見える。子実体の表面には、突起物が多いが、これは胞子ではない。胞子は、この丸い子実体の内部につくられる。土と菌糸を一緒に掘りだして、植木鉢に植えておくと、胞子がつくられるまでの様子を、教室で観察できて面白い。(つづく)